

マーケット概況（2024年6月）

6月の債券相場は、インフレ鈍化を示す内容となった個人消費関連指標を受けて米国債相場が上昇した流れを引き継ぎ、10年374回債は前月末比-0.5bpの1.065%で取引を開始した。その後も市場予想を下回る経済指標が相次いだことで米国債相場が続伸したことに加え、4日の10年債入札と6日の30年債入札を順調に通過したことから債券相場は上げ幅を拡大した。7日発表の5月米国雇用統計が市場予想を大きく上回り米国債が反落すると売りが優勢となる場面もあったが、フランスの政局不安に加え、14日の金融政策決定会合で具体的な減額計画の発表が次回会合に先送りされたことから買い安心感が広がり、10年374回債の利回りは0.915%まで低下した。しかし、為替市場で円安が進行する中、日銀が早い段階で追加利上げに動くとの思惑が強まると金利先高観が再燃し、債券相場は反落に転じた。25日の20年債入札と27日の2年債入札は無難に通過したものの徐々に下げ幅を拡大し、20年債・30年債はカレントとして2011年以来の安値を更新し、月末にドル円相場が37年ぶりとなる161円台をつけると10年374回債の利回りは1.085%まで上昇した。ただ、この日行われた買入オペを無難に通過したことで買い戻しも入り、10年374回債は結局1.050%で取引を終えた。

<短国市場>

前月までの良好な需給環境を引き継ぎ、月初に行われた6M1235回債入札では最高落札利回り0.0877%と、投資家需要が旺盛で順調な結果だった。14日の日銀金融政策決定会合で現状維持が決まると1Yゾーンにも買いが波及し、19日の1Y1238回債入札では最高落札利回り0.1492%と前月比5.0bp程度低下し、セカンダリーでは0.120%まで買われた。21日の3M1239回債では平均落札利回りが-0.0035%と3月入札以来のマイナスレートとなったほか、6M1235回債ではショートカバーの動きから強い買いニーズがあったものの、マイナスレート近辺では投資家の買いが見えづらくなり、28日の3M1240回債入札では最高落札利回り0.020%に金利上昇した。

<一般債市場>

6月の定例地方債は5年債と10年債がともに前月比1bpタイト化し、国債カーブ対比+6.0bpで条件決定した。5年債は4ヵ月連続、10年債は3ヵ月連続のタイト化となった。引き続き地方債の需要は旺盛ではあるが、起債レベルがセカンダリーの水準に近づいていることから一段のタイト化には繋がっていない。18日の社債買入オペは、3ヵ月ぶりに前月比で金利低下となった。3月の日銀金融政策決定会合で来年中のオペ終了方針が示されていることから引き続き売却需要は継続しているが、14日の日銀金融政策決定会合の後、国債の短期ゾーンが金利低下しており、3年以下を対象とする社債オペへの売り圧力が後退した。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#374	1.065(3日)	0.915(14日)	1.085(28日)	1.050(28日)
#373	1.045(3日)	0.890(14日)	1.060(28日)	1.015(28日)
#364	0.815(3日)	0.660(17日)	0.815(3日)	0.780(28日)
#168-#169(5Y)	0.635(3日)	0.500(14日)	0.635(3日)	0.585(28日)
#188(20Y)	1.870(3日)	1.700(14日)	1.930(27日)	1.865(28日)
#1229-#1235 TDB(6M)	0.058(4日)	0.040(7日)	0.085(6日)	0.043(7日)
#1234-#1240 TDB(3M)	0.020(7日)	-0.001(21日)	0.025(26日)	0.025(26日)